

所沢の民話『河童の詫び証文』で語られた話の続きで、その後の河童たちの悪さの顛末がありました。民話の会では、以下の掲載文をもとに、話を膨らませ台詞入りの楽しい語り文にして紹介しています。

## 『河童のお伊勢参り』

むかしのお話です。武蔵の国の持明院（所沢市北秋津）の近くを流れる柳瀬川には、久米の曼荼羅淵という淵がありました。

その淵には河童がすんでいまして、このたび人間のまねをして、お伊勢参りにいくことになりました。

実はこの河童は、以前、悪さをして人間につかまり、お坊さんに説教されたうえ、「二度と悪さはいたしません」と、わび証文を書いたことがあるのです。

ところが、そのときの証文は、すでにお寺の火事で焼けてしまっていました。それをいいことに、

るべえ」と、二匹の仲間をさそいました。すると、仲間の河童も口をそろえて、「うん、わしらもぜひいってみたいと思ってたとこだ」といって、みんなでお伊勢参りにいくことにしました。

「まず、人間さまに化けなきゃなるまい」と、三匹の河童は人間に化けました。「格好はどうでも、人間さまは、お金さえあれば、どうにかなるもんだ」と、みすぼらしい身なりの人間に化けて、そろって旅にでました。

ある宿屋に泊まった「三人」は、金づかいも荒く、「じゃんじゃん、ごちそうを持ってきてくれ」といっては、たらふくごちそうを食べ、お酒を飲み、宿の主人や女中さんなどにも、気前よくお金をやりました。しかし、金持ちにしては、きたない格好をしているし、ふるまいもどことなく下品です。宿の主人も、「はて、奇妙な三人づれじゃな」と、首をかしげておりました。

翌朝、宿の主人は「三人」が宿立ちをしてから、もらったお金をたしかめてみました。すると、どうでしょう。なんと、そのお金はすべてタニシのふただったのです。

この河童たちは、その後、人間につかまって、わび証文をとられたかどうかは、はっきりしないということです。

（出典 日本の民話 300 著者 池原照治）



曼荼羅淵 柳瀬川

河童は、「人間さまは一生に一度は、必ずお伊勢参りをするそう。わしら河童も、一度はいつてみ



（絵：民話の会 新井 智子）